

## 子宮頸部腺癌と体部腺癌の細胞学的差異

山根 弘文

### I はじめに

子宮に発生する腺癌は大きく分けて子宮頸部に発生する頸部腺癌と体部に発生する体部癌に分けられるが、その鑑別は治療方針に直結しているだけに極めて重要であるが、いまだ頸部の類表皮癌のように細胞学的な詳細な研究と統一した見解は出されるに至っていない。そこでこの両腫瘍の細胞学的特徴とその差異についてPapanicolaou染色標本について標本背景、出現様式、腫瘍細胞の細胞質、核について検討を行い又文献的考察を行ったので報告する。

### II 材料および方法

標本採取は綿棒にて頸管内擦過及び増測式ポリ製カニューレ吸引法にて子宮体内膜吸引Smearを採取したものである。症例数子宮頸部腺癌12例、子宮体部腺癌18例について検討を行った。

### III 結 果

#### 標本の背景及び配列

腫瘍性背景は頸部腺癌に多く蛋白質様の凝結物がみられるものが多く、体部腺癌には子宮体部より直接塗抹においては多数の赤血球、白血球と組織球様細胞が常に認められ癌が進行し炎症をきたした時は壊死細胞、細胞破片がみられる。

表1 子宮頸内膜腺癌と子宮体内膜腺癌の細胞学的鑑別点

項 目	頸内 膜 腺 癌	体 内 膜 腺 癌
標 本 背 景	腫瘍性で汚い	組織球様細胞出現
細 胞 配 列	柵状配列、ぶどうの房状	乳嘴状、高い重積性
細 胞 の 大 き さ	大 型	小 型
細胞の形態の差異	極めて背の高い細胞群	不 定 型
細胞質空胞形成	大型、小型とも多い	大 型、小 型 あり
粘 液 産 生 傾 向	強 い	弱 い
核 ク ロ マ チ ン	細顆粒状、淡核の出現	細顆粒状ときに粗大化
核 小 体	大きく、しばしば出現	ときに小型
腫瘍細胞の多寡	多 い	頸管擦過の場合少い
腫瘍内血球のとりこみ	少 い	多 い
細胞質の量	豊 富	僅 少

配列については頸部腺癌細胞は正常頸管細胞の特徴と

される一層の背の高い円柱上皮を思わせる癌細胞が柵状の配列を示したり、又ぶどうの房状や粘液をもった集塊状のもの等が多い。体癌は乳嘴状配列を示し重積性が高度であるものが多いが孤立散在性のももある。

細胞質は薄くレース状であり大きさは一般に頸部腺癌が体部腺癌よりもやや大きく細胞質量も多い。その染色性は好酸性を示すものもあるが両者の大部分が好塩基性を示す。細胞質内空胞は頸部腺癌に大型空胞が出るものもある。粘液産生傾向の強いのは頸部腺癌に多い。体部腺癌細胞には小型空胞が認められ細胞質内白血球の取りこみは内膜腺癌細胞にかなり特徴的な所見で細胞質内に浸入した多核白血球は比較的保存がよく変性ににくい傾向がある。頸部腺癌細胞にはこのような白血球浸入は非常に少ない。

#### 核及び核小体について

核は両者とも円形、楕円形、類円形でクロマチン構造は大部分細顆粒状であるが、粗大顆粒状のものもある。核縁の不正は体部腺癌の方に多く一般に両者とも緊満感があり肥厚もあるが変性核では核の中央部は、むしろ淡染しクロマチンは核縁付近に集まっているものもある。粘液のため核圧排像を示す。核小体の出現は頸部腺癌細胞の80%、内膜腺癌細胞の50%に出現しているが肥大した大型核小体は頸部腺癌細胞に多く多核小体も多い。体癌の核小体は一般に小型の方が多い。

Papanicolaou染色では核小体は赤色～赤紫色を呈し軽度変性した核の方が目だつようになる。

### IV 考 察

子宮における腺癌の発生率は頸部腺癌で5～10%<sup>1)</sup>体部腺癌は近年特に増加の傾向が著しく癌研<sup>2)</sup>の1975年の報告では15.3%に達している。頸部の癌は、その大部分が扁平上皮癌であり、その発生は扁平円柱上皮境界の円柱上皮域に発生することが多く50才前後がピークであるが頸部腺癌では若年者の発生もみられ、その一部は扁平上皮癌の発癌因子とは別の可能性も考えられる。その材料の採取は容易で頸管内擦過標本で100%近く検出できStoll<sup>3)</sup>は細胞診の反復により頸管内膜に局限した上皮内癌の発見さえ期待しうるといっている。

体部腺癌は欧米諸国では人種によって30%を上回る数字の報告も少なくないが日本では従来5%内外の発生率

と考えられていたが日本でも近年増加の傾向が著しいことより癌検診の中に体部癌の検査を入れている県がふつつつある。体癌患者を詳細に調べてみると不妊、肥満、糖尿病、高血圧などの者が多く卵胞ホルモンが発癌促進因子であることが指摘され、その発生は閉経後の婦人に多く性周期の認められる婦人では内膜が常に更新され癌の定着する余地がないと考えられる。

患者の90%以上は不性々器出血を主訴とするが、その量は少ないのが普通であり、その約30%<sup>9)</sup>は子宮筋腫と合併している。Stoll<sup>9)</sup>は体癌の細胞診において問題となる疾患として、機能性出血（内膜の腺囊腫性増殖を伴う卵胞存続、粘膜ポリープと腺腫、老人性子宮内膜炎、高血圧に伴う血管障害をあげている。）臨床ではこれらの鑑別が重要であろう。

体内膜癌の材料採取には膣円蓋採取、頸管塗抹、子宮体部より検体を採取する方法等があるが、体癌からは早期のものは少数の細胞より剝離せず、しかも癌細胞は退化変化をきたしやすく自家融解をきたし容易に細胞構造を失うことが多く膣塗抹の体癌検出率は26%<sup>9)</sup>前後と低率であるに対し最近では直接採取法が行われ特に増測式ポリエチレン製カニューレ吸引法では野田<sup>12)</sup>100%、岡島<sup>7)</sup>の1979の100%、山内<sup>8)</sup>の86%、木寺<sup>9)</sup>84%とほぼ頸癌検出率とほぼ同様の成績を期待できるようになった。

#### 頸部腺癌の細胞像

極めて背の高い粘液産生タイプの柵状配列やブドウの房状配列を示す腺癌細胞は頸部腺癌独特のものであった。細胞の集塊状の出現、細胞の不規則な配列、核間距離の不均衡、核偏在、クロマチンの細顆粒状凝集、核縁は軽度肥厚であるが核小体は1個のものが多く多発するものもあり又巨大な核小体のみるものもある。核小体は多くの症例に認められた。

細胞質は薄くて比較的豊富で好塩基性で細胞質内空胞がみられ大きな粘液空胞の場合は核を辺縁に圧排している像もみられた。今回の症例の中には一見腺癌か未分化扁平上皮癌か判定困難なものもあったが、この鑑別点についてHopman<sup>10)</sup>は次の注目すべき点を挙げている。扁平上皮癌からの塗抹においては正常から悪性へのすべての移行型の扁平上皮細胞（核異型細胞）が認められることを強調している。

#### 体部腺癌細胞像

細胞は頸部腺癌細胞より小形で細胞質は少なく好塩基性に淡染し空胞を認め細胞質内空胞中によく保存された多形核白血球がみられ、核は偏在傾向を示し核縁は緊満感ありクロマチンは細顆粒状のことが多い。扁平上皮癌のように核の濃染やクロマチンの粗大化は見られない。核小体は赤色～赤紫色の大きなものが1個から数個認め

られた。西<sup>11)</sup>によると核小体は分化の高いものでは小さいが低分化なものほど数が増え、巨大化し、低分化扁平上皮癌細胞（集団として合胞状出現）との鑑別が困難なこともあり、このようなものは予後不良であるといっている。野田<sup>12)</sup>は時として砂瘤体をとともなうことがあるといっているが今回の症例には認められていない。

腺癌細胞以外の膣smear中に出現する扁平上皮細胞が年齢の割に成熟型を示しMaturation in dexは右に偏在することが多いのも注目すべき点である。

## V 結 論

頸部腺癌と体部腺癌の塗抹標本について細胞学的検討を行い以下の知見を得た。

①頸部腺癌は粘液様物質をもっているものが多く背の高い柵状、ブドウの房状配列を示し核小体も大きく数も増加している。

②体部腺癌では組織球様細胞の出現と乳嘴状配列、小型核小体、悪性細胞も比較的小型で好塩基性の小水泡状の細胞質内に変性の少ない多核好中球の浸入がみられるものもある。これらの点に注意して観察すると両者の鑑別がある程度可能なことを示唆された。

## 文 献

- 1) 天神美夫、編集：新婦人科細胞診断学（日米欧の比較を中心に）、医学書院、122～123、1977
- 2) 鈴木博一、岩崎 純、増測一正、平田守男、南 敦子、佐野裕作、都竹正文、高橋由美子：子宮体部癌の細胞診、日臨細胞誌、16、1977
- 3) Stoll, P., Jaeger, J. & Dallenbach-Hellweg, G: Gynäkologische Cytopic. Springer-verlag, Berlin, 1968
- 4) 滝 一郎：子宮内膜、日臨細胞誌26、1972
- 5) 野田起一郎：子宮体部癌の細胞診、日臨細胞誌、7、1、1968
- 6) 野田起一郎、井上芳樹、佐々木秀敏、池田正典、堀井高久、服部 浩：体癌の吸引細胞診、日臨細胞誌、18、377、1979
- 7) 岡島弘幸、増測一正、岩崎秀昭、谷口一郎：癌研婦人科における内膜細胞診—増測式反復吸引細胞診について—、日臨細胞誌19、1、1980
- 8) 山内一弘、根本裕樹、鈴木博一、増測一正、平田守男、平田利邦：ポリチューブ内膜吸引法による子宮体癌の検診成績、日臨細胞誌、16、2、334、1977
- 9) 木寺義郎、岩坂 剛、塚本直樹、松山敏剛、柏村正道、柏村賀子、井上 功、滝 一郎：子宮体部癌の細胞診について—特に病理学的特徴との関連性について—、日臨細胞誌、20、3、1981
- 10) Hopman, B. C. :Cytology of endocervical ade-

nocarcinoma, Acta Cytol, 4, 331, 1960

11) 西 国広：細胞診のすすめ方，近代出版，74，1980

12) 野田 定：婦人科鑑別細胞診断図譜，147，1979